

論点

今年はいタリヤで主要国首脳会議(サミット)が開かれる。先進7か国(G7)は、昨年5月に日本が議長国を務めた伊勢志摩サミットの成功を継続していかなければならない。

欧米では、ポピュリズム(大衆迎合主義)に対する懸念が強まっている。昨年は英国が欧州連合(EU)離脱を選択し、米国ではトランプ大統領が誕生した。

今年もフランス大統領選やドイツ総選挙を控え、各国でポピュリズムを駆使する排外主義勢力や極右が勢力を増している。戦後国際秩序を支えてきた自由、民主主義、自由貿易体制、法の支配などの価値観が、危機

に直面しているとの見方も広がっている。

こうした国際社会の不安定化は、一つの要素だけでは説明できない。四つの要素を考慮すべきだ。

第一に、経済の長期的見通しに対する悲観論。こ



エットーレ・グレコ氏
Ettore Greco イタリア国際問題研究所(IAI)所長。学術誌編集長、米アルキメデス研究所客員研究員などを歴任。57歳。

経済、難民対応 G7の重要性

これはグローバル化の過程でマイナスの影響を受けた人々の間に強く、とくに若い人に顕著だ。

第二に、移民、難民の流入で、自分の住んでいる地域社会が多様化することに對する不安感がある。

第三は安全保障上の懸念で、主要都市をテロで襲われた欧州の傷は深い。

第四は、公的機関、多国間機関に対する信頼感が歴史的に見て極めて低くなっていることだ。とくにEU

への信頼低下は著しい。

今後も開かれた国際システムを維持していくには、グローバル化から取り残された人を守らなければならない。人の自由な移動を、ある程度、効率的に抑制する方策を関係国が協調して考えることも必要だろう。北大西洋条約機構(NATO)や、価値観を共有するアジアの国々の間の同盟、連携の重要性も改めて認識しなければならない。その意味で、EUやG7など国際機関、多国間の枠組みが果たす役割は、むしろ大きくなっている。

こうした中、3月3日

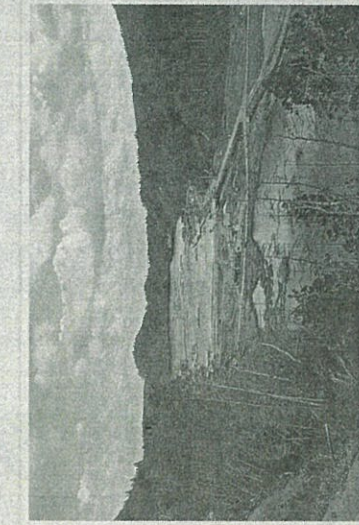
5日の3日間、世界が直面する課題を議論するために東京で開かれた東京会議(言論NPO主催)に参加した。G7と新興国のインド、インドネシア、ブラジルの計10か国の有力シンクタンク(調査研究機関)の代表が集まり、サミットに向けた提言として「緊急メッセージ」をまとめた。

岸田外相とトミニコ・シヨル駐日イタリア大使に手渡した提言では、自由と民主主義という規範を持つ今日の意義と、国際協調と国益のバランスの大切さを再確認した。また、グローバリゼーションで除外さ

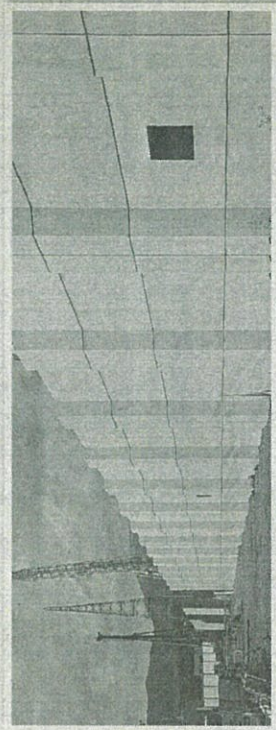
れていると感じる人を減らすには各国が経済システムを強くする必要があるとの考えに立ち、国内の構造調整や産業構造の高度化への対応も求めた。難民問題については、世界全体で取り組むべき課題であり、安定的で持続性のある国際秩序を作るうえで優先度が高いとして、G7が力を合わせていくよう訴えた。

提言内容は実践的なアジアエンタ(検討課題)となっている。これがサミットの宣言にも反映されることを願い、イタリア政府や有識者コミュニティともさらに議論を深めたい。

* 東京会議の提言に関する記事は、「ヨミウリ・オンライン」深読みチャンネル「www.yomiuri.co.jp」で読めます



舞根集落は防潮堤不要を選んだ(高台から望んだ舞根湾。手前は出現した干瀬) 被災地各地では防潮堤の建設が進む(宮城県気仙沼市で)



祭に1000人以上が集ったアサリ、ニホンウナギアオサギなど生き物の宝庫。山際に近い淡水には、トウモロコシやウオもいる。ここで環境教育活動をしていきたいと準備を進めている。

防潮堤を造らず

2011年夏、気仙沼市震災復興市民委員会の委員になった。委員会でも、宮城県からの防潮堤建設についてのアクセスを見せられ、驚いた。海抜9.9のコンクリートの壁を造る計画だった。ちょうど舞根集落では、高台移転について話し合われていた。

移転先が決まって一段落した12年初め、集落は全体会議を2回開き、高台に移転する予定だった33軒が一致して防潮堤は不要と決めた。「舞

根集落(自治会名は舞根2区)は「防潮堤不要」を選択し、もともとなかった防潮堤はこれからもできない。気仙沼市ではもう一か所、防潮堤の建設をやめた集落があるが、ほとんどの場所では、防潮堤建設が

壁を造ると海が見えなくなり、津波を察知できない。海が身近でなくなる。水の力を知らない子どもが増える。自然を知らなければ何が危ないか、安全か、判断できない。

《舞根集落(自治会名は舞根2区)は「防潮堤不要」を選択し、もともとなかった防潮堤はこれからもできない。気仙沼市ではもう一か所、防潮堤の建設をやめた集落があるが、ほとんどの場所では、防潮堤建設が

水の方知らない、と危ない、



夢のように美しい舞根湾の海に、朝起きて海パンさ飛んが主筆の参加者の中にもいたという。

知らなければ、危ない。津波の海で遭難しかけて生還した島山さんの言葉に、説得力がある。その思いが、海を遠ざける防潮堤は要らない、という集落の総意に親なつた。

自然に頼むことと、人間の技術力で防災減災をすることとの両立は、簡単ではない。自然を遠ざけること、危険性を肝に銘じ、備えていくしかない。(河)

「危険」胸に備え

これから生まれてくる子どもたちを含む住民が復興の主役となるべきで、今生きてい

復興をめぐる議論では、世代間ギャップを感じた。40歳以下の方は、意外と次

けそめがけて飛び込んだ。大島という島に流れた。生き残ったからには、自慢できるふたを次世代に引き継ぎたいと思う。震災後、建設的な議論をしようとする人の厚い層ができた。海とともに生きる。それしかない。